

喜光寺の調査

—第433次

1 はじめに

喜光寺は養老5年（721）年に行基によって創建されたとされ、行基が入寂した寺としても知られている。現本堂は室町初期に再建された金堂で、国の重要文化財に指定されている。1969年には発掘調査がおこなわれ、現本堂の前進建物の基壇や、南門とされる痕跡が確認されている（奈良県教育委員会1969『喜光寺旧境内緊急発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告第12集）。

今回の調査は喜光寺南門復原工事に先立つものである。復原南門の位置は、南門跡とされるところのすぐ北に予定されており、調査区はこれに対応した東西約15m、南北約14mである（図189）。面積は約204㎡。これは現境内と、その南の旧公園地にまたがる。調査は2008年2月18日に開始し、3月12日に終了した。

2 基本層序

調査区の層序は現境内と旧公園地で異なる。調査地の北1/3の部分占める現境内地下の層位は次のとおり。地表下は現在の盛土（厚さ約40cm）、旧盛土（厚さ約30cm）、整地土（厚さ約30cm）、地山の順である。

後述の達磨窯や廃棄土坑付近では、窯壁や瓦を含む層（厚さ約30cm）が旧盛土と整地土の間に入る。また、達磨

窯の峠部分を作るために、厚さ40cm程度の整地をした可能性がある。

調査地の南2/3の部分占める、旧公園地下での層位は次のとおり。現地表下は礫が多く混じる造成土（厚さ約90～130cm）、旧水田の耕土・床土（厚さ約50cm）、遺物包含層（厚さ約10cm）、地山の順である。

地山の検出高は現境内地では約74.4m、旧公園地下では約74.2mである。なお、旧公園地下においては地山である青灰色砂質土と、やはり地山であるオリブ灰色シルト質土の違いが明瞭であり、自然流路が存在した可能性がある。

3 出土遺構

旧公園地下では、旧水田による削平をうけており、土坑1基と耕作溝等を検出したにとどまる（図190）。

土坑SK2895 調査区南東隅の壁面で確認した土坑。地山を掘り込む。掘方は南北で1.1m。深さは1.0m。

現境内地下では、古代および近世以降とみられる遺構を複数検出した。

土坑SK2896・2897、2902～2907 達磨窯SY2900や廃棄土坑SK2901以前の土坑。性格は不明。SK2896・2897はともに埋土が褐色系。古代とみられる土器が少量出土している。SK2902～SK2907の埋土はいずれも黄色系。

達磨窯SY2900 調査区北東部の壁面と、一部平面で検出した東西方向に主軸をもつ瓦窯（図191）。半地下部の床・畦が残存しており、地上部の構造物は壊されて床の上に

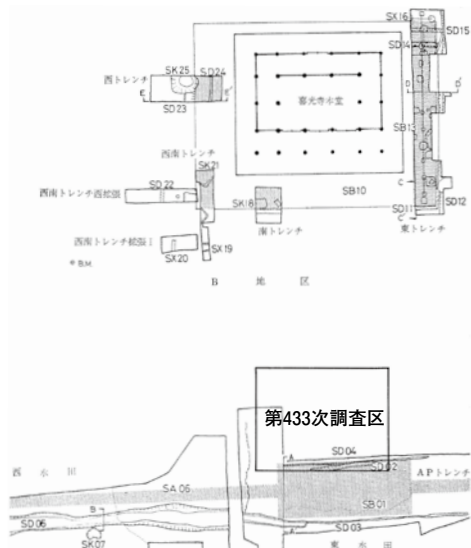


図189 第433次調査区位置図

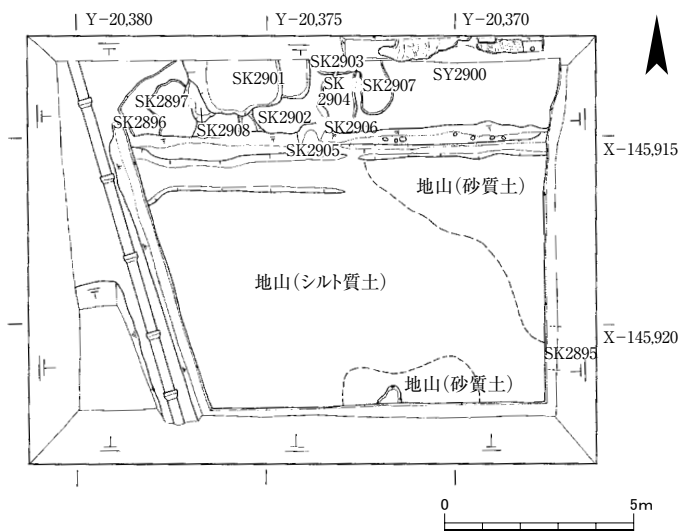


図190 第433次調査遺構平面図 1:200

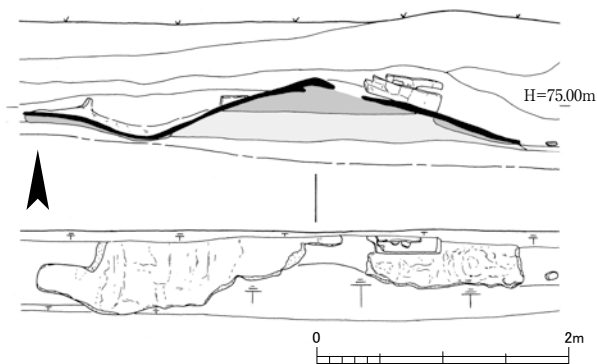


図 191 達磨窯 SY2900 の平面図・断面図 1:60

堆積していた。西端では窯壁の立ち上がり、焚口を確認しており、焚口から峠までを折り返すと、全長約4.4mに復元できる。焼成部と峠の比高差は最大で0.45mである。立ち上がり部の窯壁は厚さ約10cm。外面が橙色、内面は暗青灰色を呈する。

床は約5cmの厚さで、径1mm程度の長石粒を含んでおり、褐灰色で非常に堅い。表面は粗いものの、峠や焚口付近は平らに仕上げられている。これに対し、焼成室付近では床の表面は皺状を呈する。床の下層の整地土は赤変しており、とくに峠や焼成室の下で赤変が著しい。

畦には直方体の磚を使用しており、これを窯の主軸方向にあわせて置く。残存していたのはごく一部で、最下段と2段目の破片を確認している。比較的死存状況が良好な、峠の東にある最下段の磚は西端が欠失しており、残存長は60cm。厚さは東端が14cm、西端が10cmで峠の傾斜にあわせた作りになっている。したがって、この磚は畦の専用品だろう。磚の胎土は床と同じとみられる。

廃棄土坑SK2901 達磨窯の西で長さ3.35mの土坑を検出した。一部は調査区外に延びており検出できたは幅1.4m。深さは0.5mである。土坑の底面には厚さ2cmの炭層が2枚あり、その上層には瓦や磚、達磨窯の上部構造物が堆積する。達磨窯SY2900の灰原として数回利用された後、窯の廃絶にともない窯の構造物が廃棄されたのだろう。

土坑SK2908 達磨窯SY2900や廃棄土坑SK2901以降の土坑。SK2901を壊している。

4 出土遺物

土器 今回の調査で出土した土器類の総量は、プラスチックコンテナで2箱分。土師器、須恵器が出土しているが、ほとんどは小破片である。(加藤雅士)

瓦 本調査区で出土した瓦類の種類と点数は表25と図192に示した。1は軒丸瓦で「菅原寺」銘の外区部分が出土している。1969年の喜光寺境内の調査で出土した同銘の瓦と同范である。時期は鎌倉時代から室町時代初期であろう。2と3は唐草文の軒平瓦である。文様のほか脇区に幅があること、瓦当裏面や平瓦部凸面の調整、全体の色調などから江戸時代前半には収まるであろう。4は唐草文の軒棧瓦で左脇区に丸瓦当を接合するための加工の痕が残っている。江戸時代後半に属する。

SY2900上層からはスサ入り粘土が付着した瓦が出土している。この付着粘土は焼けていない。瓦は平瓦が多く丸瓦は極すくない。瓦は全体に淡橙色を呈し一部灰色の部分がある。これらは窯壁の構築材として使用された。

磚 SK2901からは大量の磚が出土している。出土総重量は110.6kgで多くは破片である。完形が2点出土しており、それぞれの大きさは長さ30.7cm、幅17.5cm、厚み10.5cm、重量11.96kg、長さ32.5cm、幅17.2cm、厚み10.5cm、重量10.80kgである(図193)。このほか、破片だが幅18.5cm、厚み11.0cm、長さ35.2cm、幅18.5cmの2例もある。計測値を比較すると、完形品と破片の資料から少なくとも大小2つの規格があったといえよう。

これらの磚は胎土に5mm以下の砂粒とスサを多く含み、焼成は良好で全体に灰色を呈する。型づくりで、長辺の角はすべて丸みを帯びており、短辺の角は直角である。磚の表面にはスサ入りの粘土が焼き付いている。ただし、完形品をみると、小口面2面、長手面2面と平手面1面にはほぼ全面に粘土がみとめられるが、別の平手面は粘土がほとんどみられず磚の面が露出している。また、小口面1面の粘土は生焼けの状態である。こうした状況から、この完形の磚は窯内の通焰道を形成する畦の小口頂部に据えられたと考える。このため、下面と後方

表 25 第 433 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		道具瓦		
型 式	点数	型 式	点数	種 類	点数	
中 世	1	中 世	1	面戸瓦	2	
巴（中世）	3	近 世	7	鬘斗瓦	2	
巴（近世）	1			獅子口	1	
型式不明	1			その他	1	
軒丸瓦計		6	軒平瓦計	8	道具瓦計	6
丸 瓦		平 瓦				
重 量	22.2kg	147.7kg				
点 数	100	1101				

の磚に接する部分にはスサ入り粘土が少ないか、生焼けの状態がみられたのであろう。この磚の規格や色調は幕末以降の赤煉瓦や耐火煉瓦とはことなるため、時期も江戸時代後半から幕末にかけてのものであろう。(今井晃樹)

窯 壁 達磨窯の窯壁部材が、窯本体と西南のSK2901から多量に出土した(図193)。取り上げただけでも総量176.0kgになる。繊維質のスサを多量に混ぜ込んだ粘土で、丸瓦・平瓦も比較的多く窯壁内に混ぜ込まれている。なお、窯壁はほとんどがSK2901に捨てられた状態で出土しており、窯の構造に関しては不明である。(城倉正祥)

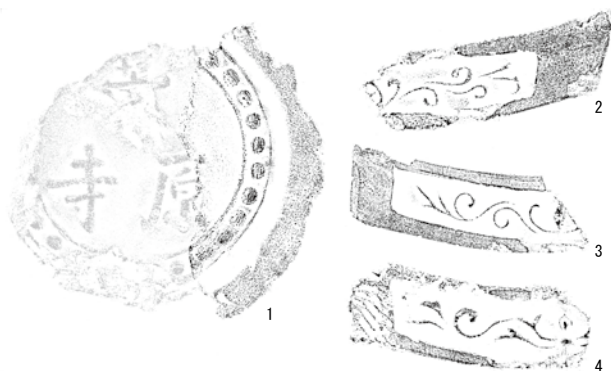


図 192 第 433 次調査出土軒瓦 1 : 4



図 193 第 433 次調査出土の磚と窯壁



図 194 第 433 次調査区北辺部 (南東から)

5 おわりに

調査区のうち旧公園地下では、水田による削平で明瞭な遺構を検出することができなかった。これに対して現境内地下は遺構が良好に残存していた。達磨窯の峠の頂部は地表下45cmにあり、境内の未調査地においても他の遺構が良好に残存している可能性がある。

達磨窯SY2900は畦に使用された磚から、江戸時代後半から幕末のものと思われる。窯の長さは復原で約4.4m。幅は不明であったが、発掘調査後の立会い調査で窯壁の立ち上がり部の北端を確認したので、復原が可能となった。焚口の幅が0.3~0.4m程度と仮定して窯の中軸線を設定すると、幅は復原で約2mとなる。この規模は磚から導かれた窯の年代観と矛盾しない。(藤原学2001『達磨窯の研究』学生社)。達磨窯の畦には近代以降は耐火煉瓦を用いるようになるが、磚の使用はそれを先取った可能性もあり、今後類例の増加が待たれる。

SY2900や廃棄土坑SK2901から出土した瓦は、境内に現存する建物である本堂や寺務所、塀に葺かれているものとは異なる。よってSY2900が築かれる具体的なきっかけについては不明である。しかし中・近世では寺院での部分的な瓦の需要に対し、瓦の製作者が直接現地に赴いて瓦を焼く場合があると考えられており、金堂の近くなどで達磨窯が検出される例がある。よって本例も喜光寺や周辺での瓦の需要を満たすため達磨窯が築かれたものと考えられる。

喜光寺は奈良時代創建の古い寺だが、創建当時の伽藍配置など不明な点も多い。今回の調査はその歴史のなかでも新しい部分を垣間みたといえるだろう。(加藤)